

プロ婦人と男性批判

一

男性批判は既にブルジョア婦人によって済まされたというものがある。馬鹿な！ そうした断定のいかに間違っているかを言ってみよう。

二

その前に、昔から男性が、いかに勇敢に（ある時は真摯に）女性を見たかを考えねばならない。

女性は男性の肋骨であると見たのも男性であつたし、女性に頭脳ありや否やと考えたのも男性であつた。

医学的に、心理学的に、哲学的に、倫理的に、堂々と専門的の学問によって、彼等は女性を批判して来たのである。

それに対して女性はどうであつたか。

ブルジョア婦人の先駆者にして、かの激越なる『女権擁護』の著者、メリー・ウォルストン・クラフトすら、彼女は男性の偏見の一部分(?)から女性を救わんがために戦つたのみであつて、かつての男性が女性に対して加えたような積極的な批判とか解剖などは更にしなかつた。いわんや堂々たる専門的の学問によつて彼等を手痛くやりこめるというよりなことは全然なかつた。

同じことはシュライネルにせよ、ギルマンにせよ、ケイにせよ、これら偉大なブルジョア婦人についても、ひとしく言えることだ。

いったいブルジョア婦人には二つの型がある。その一つは勇敢な、だがもちろんその勇敢さは、クラフト女史のように相対的、消極的、局限的のものである場合のそれ(この型は初期が多い)と、他の一つは妥協的に男性批判を遠慮し、もしくは無自覚的に男性の偏見を支持するそれである。(これは現代に多い。女流名家などというものを見よ。また一切の性別的の議論はブルジョア婦人のものだという説のもとに(この説そのものは男性によつて唱え出されたものだ)、非常に多く残留している男性的の偏見(ひとり男女間の問

題に限らず、社会観の上においても、宇宙観の上においても)をそのまま支持しているのなども、明らかにブルジョア的である。

かくの如く、男性批判がブルジョア婦人によつてまつとうざれたという説は、単なる虚妄に過ぎない。

それは何故か? 何故ブルジョア婦人は男性批判の前に、しかく臆病であるか。あるいはまた無関心であるか。それはブルジョア時代は婦人に批判の自由を与えるほど、また婦人に批判の目をもたせるほど、婦人を解放していかないからである。

かくて今われわれ無産婦人によつて、初めて果敢な批判がなされようとする。われわれはかつて多くの男性が、単なる漫罵でなく、科学的な態度と思索とのもとに、われわれ女性を批判した事実を知っている。その如くに今われわれの中からもそうした批判が芽生えるであらう。

ボルの婦人部は、極端に無力であるというが、それは彼女達は何らの批判的の、従つて独自の識見がないからである。彼女達は多分の男性的偏見にみちている党の理論、あるいは党の戦術に、唯々諾々と従つてゐる。この如きを自由あり、解放された女性であるという事が出来ようか。

女性よ、あらゆる批判をなせ。高く頭を上げて、その思うところを明確に主張しろ。しかもわれわれは次のように考えるのだ。「幾千年間の強権主義社会は、即ち男性専制主義社会であつた」と。

ゆえに今日強権主義を奉ずる一切の男性は、必然に男性専制と関連する意識をもつ。ブルジョア男、マルクス男、これである。

彼等の悪はもちろん彼等の制度からきたもので、例えば両者は強奪婚（獲得婚）を実行する。（それはやむを得ないこととしてであるが、このやむを得なくさせていることにこそ注意を要する）婦人を縛りつけている家族制度は強奪婚の制度化したものであるが、強権主義社会のある限り、この制度は必ず何らかの形式において残留するのだ。（このことはこの次の性の処理号で書いてみたい）

無政府主義と性の処理

無政府主義を本質的に訳すれば自治主義となる。自治主義 それは性においてもそうでなくてはならない。即ち性自治ということは、新しき性論において、唯一のものでなくてはならない。性自治とは、つまり性のことに關しては、すべて性の自然を基礎とするということがある。

それでは、性の自然は、これまでどんな風に踏みにじられていたか。性の自治はいかに阻まれていたか。この問題は広汎な視野をもつ。その概略をここに指摘する。

ひとくちに性の自然といつても、男性のそれと女性のそれとは違つてゐる。これについて生物学の上では、男性に与えられているものは「性欲」で、女性に与えられているものは「生殖」であるとされているようだ。ある学者はこういつてゐる。

「女郎蜘蛛の一種の雄は、生命を賭して雌をねらつてゐる。彼の肉体は性欲のみで出来

ている。だから性交を終ると、満足して雌から食われてしまう。それに反して雌は性交には冷やかで、嚴重な選択本能を働かせる（彼女は彼女を欲求する異性の中で最も優なるものを選ぶ）が、性交が終つて「生殖」にとりかかるところ、それは彼女にとつて真剣な時だ。すなわち彼女は生命を賭して生殖する」

だが、これは独り蜘蛛類に限つたことではない。すべての生物の雌雄はみなそうである。つまり男性の性は性欲（女性）を対象とし、女性の性は生殖（子孫）を対象としている。故に本来いわれている意味での恋愛は、実は男性のものだ。異性の姿を生命を賭して追求めるのは男性であつて、女性にはそうした熱心な恋愛はない。

このことは女性が自覚して、その本性を取り返すと共に明らかにされてくる。實際近代の女性の心の眞の姿を抉り出したならば、いかに恋愛に冷やかである彼女達であるかが知られるであらう。

彼女達は男達のような恋をしない。彼女達の眞の性的幸福は、彼女達を強く欲求する男達の、その強い欲求に触れる時を置いて外にはない。（それは彼女の生殖本能の強き現われである。なぜなら女性は「欲求」されることを第一段とし、その欲求者を選択することを第二段として、「生殖」を営むものだからだ。

ドン・ファンの恋の秘訣は、「彼女をいかに真剣に恋しているか」を彼女に執拗に示すにあるとしていたというが、實際そうしただけならば、大抵の女性を陥れるに足るだら

う。だが、それに反して男性は女性から「つけねらわれる」ことに対してそのまま心を動かさないらしい。それよりは手きびしく「はねつける」女性の強さや、及びがたさに対してのみ、心を焰と燃やす傾きをたぶんにもつものらしい。

要するに、男性に与えられたものは強烈な性欲で、女性に与えられたものは真摯な生殖である。故に男性の立場からすれば、その性の自然を生かすことは、その強烈な性欲を十分に満足させることにある。

昔、男性は女性を手に入れることに、蜘蛛の雄のそのような苦勞をした。なぜならその時分は女性の本来の性が強く生きていて、それと男性の性とが衝突していたからである。早くいえば女性は容易に男性を許さなかつたのだ。

だが、長い期間の後、男性は遂に女性を征服した。そしてその征服を制度によつて固定つけた。今や女性はいかなる男性、身ぶるいの出るような厭な男性にすらも、その呪うべき性欲の横行のもとに、甘んじて服従していなければならなくされている。

かくて一方男性は、思うままに女性を手に入れ、なお一層あくなく追い求めている。彼等は「結婚は恋の墓」などという言葉を作り出しているが、それは彼等の性欲が、いかに強烈であるかを物語っている。彼等はその性欲の奔騰するままに、女性の「性の抵抗力」「性の威厳」を破壊することに非常な努力を費した。「性の誇り」とか「性の貞操」とかは非實際的な、「高慢チキ」な夢とした。そうした女性は唾棄されるべきで、手つとり早

く「性」を提供し、「性」の取引きをする習慣こそ讀められるべきものだとした。だが、女性がその通りにすること、「征服された性」には最早や魅力がない。即ちそれは一種の「墓場」でしかないと考え出す。そして彼等呪われた男性どもは、再び他の「征服されない」女性を求めて焦り始める。

二

男性どもに与えられたこの無限の性欲は、男性どもをして種々のことを考えさせている。その一例を挙げると、「男性は百人の女に子どもを産ませることが出来る。だが女性は一人の男と交われば直ちに子どもを孕む。だから多くの男との関係は生理的に許されない。故に男性の多婦性、女性の一夫性は自然の命ずるところだ」というようなものである。この説はショーペンハウエル、エレン・ケイその他今に至るまで多くの者によって言われている。

だが、我々はそれに対してこう答える。「なるほど男性は百人の女に子どもを産ませることも出来る。だがその前に、その百人の女が同一の男性を受け入れるかどうかという実際問題が横たわっている。むしろそれよりは一人の女性を中心に百人の男が群がり集るということは自然的現象ではないか。ある貝類はそのポケットに七人の亭主を入れている。植物の雌しべが多数の雄しべを必要としていることは周知の通りだ。自然はむしろ

一婦多夫を要求しているかの如くである。即ち男性に過大な性欲が与えられているということは、そのすべてを満足せしめるためであるよりは、むしろ少ししか満足が与えられず、かくてその性的欲求を白熱せしめるためのものであり、それに対して女性をして優越的に十分に選択せしめるための仕組みではないか。男性は女性によってその性欲を調節されねばならない。即ち男性は性欲を制せられねばならない。だから男性の性欲が過多であるということが直ちに一夫多婦の理由にはならぬのみか、かえってそれは男性の性的地位（女性によって支配されねばならない）を物語ることになるのみである」

更にまたこういうことを言う男どもがいる。「妻は夫が病氣をしても夫を捨てない。しかし夫は妻が病めば性的欲求の理由から他の女を求めずにはいられない。だが、これは男女の性の相違からきていることで、許さるべきことではないか」これに対して我々は答える。「これは性よりも制度からきていることである。妻が病夫を捨てて他の男に走ることは、現在の社会では極端に排斥されているから、大ていの妻は夫を守っている。それに反して病妻の故に他の女を求める男のやりかたはむしろ当然だとされているから、大ていの男は病妻を守らない。然し、真に相愛している場合であれば、妻も夫も互いの性欲を犠牲にすることは当然だ。そしてその「犠牲」にすることそのものが、実はそれ自身の性欲および生殖の本能を正しく生かすことである。なぜならもし夫が病妻を守り切れず、他の女に走ったならば、彼は必ず病妻の怒りにあうだろう。もしくは病妻は、夫のその行為をもって、

彼女を否定したものと認めるだろう。なぜなら彼女は最早や、それがいかなる理由であるにせよ、また瞬間的の出来ごとであるにせよ、夫から「求め」られていない、夫の「求める」ものは今や他の女である事実を知るが故に、かくて彼女は当然夫と別れることを望むようになる。(女が男の生理上のことにいわゆる同情し、それに寛大であるようなやりかたは、生殖の本来に悖るものである。女性が真に自覚したならば、少しの仮借もなく、妥協もなく、即ち女性こそは最も厳かに男性に臨まなければならぬ。女性が少しでも男性の性に引きずられるようなことがある間は性の自治は断じて行われぬ。女性こそあくまでも性の支配者として、女王として位置すべきである) こうした態度の女性の前には、そしてその女性を失うことを恐れている即ち愛している男性であれば、必然的にその男性は、自らの瞬間的の性欲や妄想に打ち克たざるを得なくなる。

従来にあつても、恋女房とか、真に二人の間のさかれることを恐れている(それほど愛している)女との場合では、その女が病気をしても、男の愛は離れるどころか、一層やさしく親切になる例は普通であるとされている。女が病気をすれば、他の女を求めるなどという夫婦関係は、さしたる愛がなくて始められ、もち続けられている関係にしか過ぎない。

三

何れの時代の革命期にあつても、性の自由ということは、必ず持ち出される問題である。

フランス革命の前後に、人々が第一に考え、実行したことは、すなわち性の自由であつた。同じことはロシアにもいえる。然し、これらの革命が女性の性的自覚の伴わない片手落の男性革命であつた限りにおいて、そのいうところの「性の自由」は、常に「性欲の自由」を意味していた。即ち男性本意の盲目的な、乱脈な、唾棄すべき性行為が、その都度「性の自由」の名で横行した。またバカな女性達(男性化した、また何もかも男性の意見に従うことを革命的であるとする女性達)はそうした呪ふべき「性の自由」にすらも何の抗議もしないで、かえつてそれを支持する。実に馬鹿な女どもだ。そういう女どもが、左翼の女性だとか革命婦人だとかいわれている間は、女性は決して解放されはしない。

無政府主義の性の理想は、男性の性欲と女性の生殖との二本能の、相互的折衝によつて形づくられる。そして当然その場合にあつては、女性の支配が最も力あるものとされねばならない。

幾千年このかた、男性の性欲が女性の生殖を踏みにじつてきた。それは女性にとってはもちろん、男性にとつても不幸であつた。なぜなら男性は女性を征服したことによつて、昔の男性が経験したような、生々した真剣な恋愛をなくし、青白い性の遊戯や玩弄しか得られなくなった。今や再び女性の生殖が男性の性欲を整理支配する時代が来なければならぬ。その時我々の無政府主義の性自治は、始めてその真の姿を現わすであろう。